

〔共済連だより〕

家畜診療日誌

西部家畜診療所 田村 展敏

西部家畜診療所に待望の超音波診断装置（以下：エコー）がこの6月に導入されました。これまでに、県下の家畜診療所にすでに数台導入されており活動しています。

エコーの診断に必要な事は、①エコーの基礎知識と原理を理解、②早期妊娠診断、胎齢診断、双胎妊娠診断、早期胚死滅（以下：EED）

診断、③卵巣、子宮の機能性診断、④性別診断等です。

従来の直腸検査法による妊娠診断は、受精後40-60日令前後で行っていますが、エコーでは25-40日令で診断でき、不受胎牛の早期摘発による発情発見率と受精率の向上に伴う妊娠率の改善効果が期待できます。

まずエコー診断は、①卵巣、子宮疾患診断：卵胞発育、排卵、黄体形成の過程と子宮の形態学的な変化や子宮内貯留物の有無等の機能を推測することで、性周期のステージを把握することが可能です。②胎齢診断：胎子の体長、胴体直径、頭部長、頸部直径を計測する事で診断できます。③EEDの診断：感染症、ストレス、再受精等が考えられますが、原因は定かではありませんが、受精後56日以内の発生率が高いため再診断が必要で、羊膜嚢と胎子の大きさと輪郭の明瞭度、心臓の拍動を確認します。④双胎子診断：泌乳量が多いほど多排卵になり双胎妊娠が多くなる傾向があり、またEEDの発生率も高いため再診断が必要です。受精後28日以降が適当で両側・片側性の胎子を確認する必要があります。双胎妊娠では双子の羊膜嚢がひとつの漿尿膜を共有していることから、“Twin-line”と呼

ばれる線が見えますが、胎子の確認ができなければ再診断しなければいけません。⑤胎子の性別診断：性別診断は生殖結節（以下：GT）であり、56-58日令の間で定位置に移動するため、60-70日令で胎子の水平・垂直断層像を抽出して、臍帯後方に位置するGTを確認すれば雄、尾方向に位置するGTを確認すれば雌と診断します。

エコーは、繁殖障害の卵巣、子宮疾患診断、早期妊娠診断、双子診断、性別診断等の新しい診療技術として期待されています。今後導入が進み全国各地で多くの獣医師が使用し繁殖検診の実施方法や診断方法も大きく変わるでしょう。しかし、エコー診断の技術を習得するためには、操作方法や描出される画像の判読力の研修が不可欠でありさらに多くの症例にあたらなければいけません。

国内においても、エコー診断のセミナーが各地区で開催され、多くの獣医師が参加し診療技術を習得しつつありますが、今後も、講習会等に参加し技術の向上に励んでいきたいと思っています。

西部家畜診療所においては、まだエコーが導入されて約3ヶ月たらずで、まだ全農家に普及するまでには至っていません。今後、エコー診断を希望する畜産農家のニーズをふまえて、繁殖検診、早期妊娠診断、診療技術の向上と効果的な診療によるメリットを検討していきながら有効に活用していきたいと、日々、診療所各獣医師は一致団結し勉強、努力しています。